第6章　不変資本と可変資本

〔浜林・「『資本論』を読む」p.255〕

　読解では、p.363の不変資本、可変資本の定義から始まっている。

p.363　資本のうち、生産諸手段すなわち原料、補助材料、および労働手段に転換される部分は、生産過程でのその価値の大きさを変えない。だから私は、これを不変資本部分、または不変資本と名づける。

p.363　労働力に転換された部分は、生産過程でその価値（の大きさ）を変える。

‥資本のこの部分は、一つの不変量から絶えず一つの可変量に転化する。だから私は、これが可変資本部分、または簡単に可変資本と名づける。

**ｃ＋ｖ＋ｍ**　（お経のように覚える）

ｃは不変資本部分。原料、補助材料と機械・道具・設備。

ｖは可変資本。賃金。生産過程で価値が変わる。自分自身の価値をつくりだすだけではなしに、新しい余分な価値をつくりだす。

mは剰余価値。余分な価値。

ブルジョア経済学は、原料を流動資本に分類している。賃金も。

第6章の最初にもどっての読解

(価値の移転)

P.347　労働過程のさまざまな諸要因は、生産物価値の形成にさまざまな関与を行なう。

「労働過程のさまざまな諸要因」と

は、労働と労働対象と労働手段の3つ

が合わって物をつくりだすということ。

このとき、生産物の価値をつくる場

合に、それぞれがどうかかわってくる

のか、である。

p.347　労働はおなじ時間内に二重に労働するのではない。

「二重に‥」：

❶労働によって綿花の価値を維持する。

綿花の価値を新しい製品に移していく。

❷労働によって新しい価値をつけ加え

る。

これを同時に行い、新しい価値をつ

け加えることによって古い価値を維持　　している関係にある。

p.247　労働対象にたいする新価値のつけ加えと生産物にたいする旧価値の維持とは労働者が同じ時間内に一度しか労働しないのに……。

1回の労働で二つのことを行われる

のだ、ということ。

（具体的有用的労働によって）

労働者がどうやって価値をつけ加え

ていくのか。原料や設備に労働を加え、

その価値を製品に移していくというこ

とだが、それは労働者の具体的な労働

による。

　　　　　　具体的有用労働が価値を維持し、か

つ、つけ加えていく。

❶有用労働という具体的な観点から

は、労働者が糸を紡ぐという具体的な

仕事を行い、綿花は糸に変化させてい

る。

❷同時に、このことにより、新しい価

値をつくりだしている。新しい価値を

つくり出しているいく観点で見ると、

抽象的人間労働といえる。

　具体的な労働の支出と抽象的人間

労働という二つの性格をもっていて、

そのことによって、古い価値を維持し

ながら、新しい価値をつけ加えていく

ことが行われてる。

p.249　それが抽象的、社会的労働一般である限りにおいてであり、‥。

発明によって生産力が6倍になる。

36時間で紡ぐことができたと同じ綿花

を6時間で紡ぐことができる。労働の

力が６倍になって、生産物は6ポンド

ではなくて36ポンドになった。しかし、

加えられた労働時間はかわらない。

　　　　　　生産力が上がり、同じ1時間でも6

倍の仕事をやりますから、36ポンドの

糸をつくってもこれは以前ポンドの糸

をつくったのと同じ労働だから、その

価値も6分の1になる。

　　　　　　また、逆に生産力が落ちて、同じもの

をつくるのに労働時間が長引けばが、

その価値は高くなる。

　以上は、もちろん、社会的に必要な平

均的労働時間が前提となる…。

p.350　必要労働時間が多ければ多いほど、綿花につけ加えられる新価値はそれだけ大きいが、…。

生産力が上がれば、出来上がった綿

花の値段は安くなり、生産力が落ちれ

ば、高くなる。

（交換価値の変動）

南北戦争時、南部が戦場になり、綿花

の生産がストップした。綿花の交換価

値、具体的には値段が急騰した。綿花が

上がれば、綿糸の値段もあがる。

**ｃ＋ｖ＋ｍ**

ｖは変わらないが、移転する価値が

上がれば、綿糸の価格もあがる。

p.351　生産物において、維持する価値は、彼がつけ加える新価値に正比例する。彼は、2週間で1週間の2倍の労働、したがって2倍の価値をつけ加え、それと同時に2倍の価値をもつ2倍の原料を消費し、また2倍の価値をもつ2倍の機械を摩滅させ、したがって2週間の生産物に、1週間の生産物の2倍の価値を維持する。

新しい価値をつけ加えるのと同じ比

率で、古い価値を維持する。労働者が仕

事をする労働時間に応じて、古い価値

を維持し、価値、新しい価値をつけ加え

ていくわけだから、2時間働けば1時間

分の2倍の価値を維持し、かつ2倍の

価値をつくりだしていく。

あたりまえ！

（不変資本の価値の移転）

　　　　　今度はｃ（原料・設備）の方の話。

　　　　　　原料はどうなるか。これは使ってし

まえば綿花も石炭もなくなる。

p.352　生産手段は、それの使用価値と同時にその価値を失うのではない。

　　　　　使用価値はなくなる。燃やしてしまっ

たものを再日、燃やせない。しかし、価

値がなくなるわけではない。その価値

は生産物の移ることになる。

生産手段は…

p.352　生産手段は、それが生産手段として失う価値だけを生産物に引き渡す。

　　　　　ただし、引き渡し方はものによって違

う。

p.353　機関を熱する石炭は、車軸に塗る油などとも同様に、あとかたもなく消滅する。

　原料や補助材料は、使用価値をまったく失う。そっくり新しい生産物に移っていく。

「ほんらいの労働諸手段の場合」

はまったく違っている。

p.353　ある紡績機械がたとえば10年間で寿命が尽きたとすれば、その総価値は、この10年間の労働過程のあいだに10年間の生産物に移行したのである。

10年間で使い切る。1年ではその

10分の１が移行する。

（原価償却）

「どの人間も毎日24時間だけ死ん

でいく」

p.353　どの人間を見ても、彼がすでに何日分死んでしまっているかは正確にはわからない。

p.354　ある機械がたとえば1000ポンドの価値をもち、1000日で磨滅するとしよう。

一要因である、ある生産手段は、労働過程へ全体として入り込むが、価値増殖過程へは部分的にしかはいり込まないということがわかる。

　原価償却とは、次に機械を買い替えるために積み立てをしていくと考えても良い。

p.367　ある労働材料、ある機械、ある生産手段は、それがどんなに有用であろうと、それにたとえば150ポンド、500労働日がかかっているならば、それが役立って形成される生産物に、150ポンドより多くのものを決してつけ加えない。

p.358　注

生産手段の方は、生きた労働をつけ

加えなければ新しい価値をつくりだす

ことはできませんから、価値の移転も

価値形成もできないということ。

p.359　したがって、価値をつけ加えることによって、価値を維持するということは、活動している労働力すなわち生きた労働の天性である。

原料とか労働手段を死んだ労働、つ

まり、過去の労働の塊りと考える。綿花

をつくるのは、綿花をつくる労働を必

要だった。しかし、綿花として運ばれて

くれば、それはもう過去労働の塊りで

ある。これに生きた労働をつけ加える

と、その死んだ労働が生き返って、綿花

の価値が維持されるだけでなく、新し

い価値が生み出されていくということ。

（資本価値の維持）

p.359　この天性は、労働者にはなんの費用もかからないが、資本家には現存資本価値の維持という多大の利益をもたらす天性なのである。

普段はあまりそういうことに気が付

かないが

p.359　労働過程の強力的中断すなわち恐慌は、彼にこのことを痛切に感じさせる。

労働者は仕事がなければ、家にいるが、

資本家は原料と設備が遊んでしまう。

「死んだ労働」が死んだままで生き

返らない。

機械を休ませない－資本家にとって

は至上命令である。資本家にとって恐

慌は大変怖いことなのだ。

p.361　生産されるのは、新たな使用価値であり、そのなかで旧交換価値が再現するのである。

　羊毛で例示すると、布と上着となる。すなわち、別の使用価値をもったものとして現れてくる。布の使用価値がなくなって、

上衣としての新しい使用価値が生まれてきたということである。

（価値増殖）

p.361　労働過程の主体的要因、活動している労働力の場合は、事情が違う。労働は、その合目的的な形態によって‥。

　労働力の場合は〝無駄使い〟しないで、能率的にその目的に合わせて使われるならば「その運動の各瞬間に」新しい価値をつくりだす。

p.362　労働過程は、労働力の価値の単なる等価物が再生産され、労働対象につけ加えられる点で超えて続行される。

 6時間働いた。ここでやめてしまうわけにはいかない。あと6時間はたらく。この過程12時間続けられると新しい価値がつくり出されるわけである。

p.363　〔再掲〕資本のうち、生産諸手段すなわち原料、補助材料、および労働手段に転換される部分は、生産過程でのその価値の大きさを変えない。だから私は、これを不変資本部分、または不変資本と名づける。

p.363　〔再掲〕労働力に転換された部分は、生産過程でその価値（の大きさ）を変える。

‥資本のこの部分は、一つの不変量から絶えず一つの可変量に転化する。だから私は、これが可変資本部分、または簡単に可変資本と名づける。

（原料の値上がり）

p.363　綿花収穫の不作の結果、あすは1シリングに騰貴するとしよう。これから加工されるべきもとの綿花は6ペンスの価値で買われたが、いまや生産物に1シリングの価値部分をつけ加える。

原料が安くなる－綿花の価値は移行

するときには変わらないが、綿花自体

の価値が変わるかもしれない。その逆

もある。

原料は、資本家が勝った時の値段以上

の値段をもってしまう。資本家はそれ

を使わないで横流ししたりする。

p.364　それゆえ、このような価値革命にさいしては、加工されることのもっとも少ない形態にある原料に投機すること、したがって、織物よりはむしろ糸に、また糸よりはむしろ綿花そのものに投機をすることが、投機の法則なのである。

インフレの場合、資本家は何かをつく

るよりも、寝かして、売った方がもうか

る。

p.365　原料の価値と同じように、すでに生産過程で役立っている労働手段、‥。

労働手段の場合、すぐ売るとはなかな

かできない。

了

〔的場 超約『資本論』の読解〕

機械は価値をつくらない

第6章は、生産手段や原料が商品の価値形成にどう影響しているのかを考察している。

論点は、生産手段も原料も、過去の労働によるものであるとすれば、この部分も価値形成になんらかの寄与があるはずである。その価値が新たな価値をつくりだしていれば、価値を増殖させているのは「過去労働」であり、生きた人間労働ではないということになる。

マルクスの回答－確かに機械や原料もそれが商品であった以上、価値はある。しかし、その価値は移転された部分だけであり、それが新たな価値を生むわけではない。労働者は、まず、こうした価値を商品に移転させ、一方で新たな価値を増殖するのだ。

機械の価値を引き出しているのは

機械、原料、工場など、すべては「過去労働」である。過去をたどれば、価値に還元されるので「移転され部分だけ、新たな価値を生む」ということは、原料や燃料はそのままなくなってしまうので、「商品に移転」は比較的わかりやすい。

機械は、10年で機械の補填期間が終わるとすれば、「毎日すこしずつ」価値を移転していったと言えないことはない。

価値を形成するのは生きた労働

価値の移転は、あまり目立たないが、実は大きな役割を担っている。

価値を移転するおかげで、機械が保全されている。労働者が働くということで、一人で機械の手入れもしてくれることでもある。しかし、もうけ話にいっぱいの資本家はそれに気づかない。

恐慌になって、労働者を解雇したとき、初めて彼らがいないと機械などまったく無駄なものだと気づくのである。

マルクスは価値を形成するのは労働のみ、機械も原料も一切価値を形成しないと主張する。こうした部分ついて、価値を変化させないという意味で不変資本、価値を付加して増殖させる労働にたいし、可変資本と表現した。

マルクスの定義は、価値という観点から見たものであり一般に使われている固定資本、流動資本とは違う。